



# あるじでえ

No. 5

世田谷区教育委員会 民家園係  
〒157-0067 世田谷区喜多見5-27-14◎ 次大夫堀公園民家園  
☎ 03(3417)8492◎ 岡本公園民家園  
☎ 03(3709)6959

平成元年10月1日 発行

平成8年7月 増刷

平成13年5月 増刷

## 小泉次大夫と次大夫堀

〈はじめに〉

次大夫堀（六郷用水）は代官小泉次大夫吉次の指揮によって開削された用水です。多摩郡和泉村（現狛江市）から多摩川の水を取水し、世田谷領（現狛江市の一部、現世田谷区、現大田区の一部）、六郷領（現大田区）の村々を多摩川に平行して通り、江戸湾に注ぐ、全長23.2キロメートル、堀幅平均は世田谷領で、4.5メートル、六郷領は、南堀2.1メートル、北堀2.4メートルの用水です。慶長二年（1597）から同十六年（1611）の十五年もの長い歳月をかけて完成した用水は多摩川の沿岸に生活する人々に多大な影響を及ぼしました。ここでは、小泉次大夫と次大夫堀について見て行きたいと思います。

〈小泉次大夫吉次〉

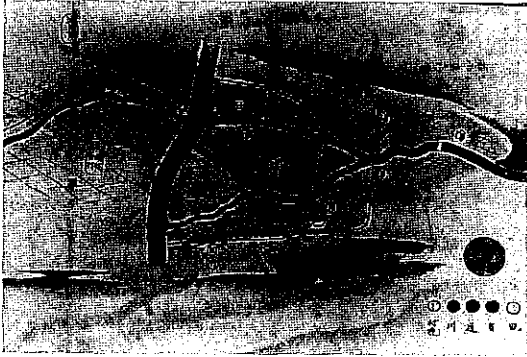
小泉次大夫は天文八年（1539）駿河国富士郡小泉郷に生まれました。次大夫の生まれからその生い立ちに関しては不明な点が多く、明確なことは判りません。小泉次大夫の出身説には駿河国の守護であった今川家に代々仕え、土木事業を得意としていた樋役を歴任していた植松家出身とされています。なお、最近植松家と親戚関係にあった小泉家出身説も出されています。小泉次大夫が生まれた富士郡は、春になると富士山の雪解け水が土地の河川や用水に流れ込み氾濫してしまう地で、人々の治水に対する関心は強く、鎌倉時代にすでに灌

漑用水が建設されていたところでした。

これらは、土木技術に優れていた植松家と小泉次大夫になんらかの関係があったとも推測され、また、小泉次大夫自身も土木技術と知識を有していたことも重々考えられることです。

天正十八年（1590）、徳川家康は小田原後北条氏滅亡後、豊臣秀吉の命により、旧領三河・遠江・駿河・甲斐・信濃の五ヶ国から関東に移封されます。関東に入国すると、ただちに未開発地の多い関東の開発を進めました。農業生産の拡大は徳川家康にとって大きな課題であったのです。関東開発の一つに多摩川の治水工事があり、用水開削などの土木技術に明るい小泉次大夫が代官に任命されたのでした。次大夫は富士郡から武蔵国橋樹郡小杉村（現川崎市）に移り住みますが、先の植松家出身説は出身の小泉郷に由来して家康らに小泉姓と呼ばれたので、植松姓から小泉姓に変えたとするものです。

小泉次大夫は慶長二年（1597）に多摩川沿岸を巡視し、多摩川の北岸側である世田谷領・六郷領と南岸側である稲毛領・川崎領の四ヶ領における用水の開削と新田の開発を幕府に進言しました。多摩川流域に広がる広大な土地を灌漑利用するためです。時に、小泉次大夫58才の高齢時でした。



六郷用水絵図  
—大蔵・鎌田村—  
(大場家文書)

### 〈次大夫堀〉

小泉次大夫は六郷領・世田谷領の各村の名主を召集し、用水開発の案内役とし、また、名主の家を作業の拠点となる宿所としました。世田谷領では、上沼部村（現大田区田園調布付近）、等々力村、上野毛村、大蔵村、喜多見村、和泉村の名主が案内役となり、用水開削の第一段階である土地の測量と杭打ちが開始されたのでした。稲毛・川崎二ヶ領と世田谷・六郷領は交互に測量・杭打ちが行われていったのですが、用水開削工事は下流から上流へと溯って行きます。世田谷領では慶長二年六月に下沼部村の測量が開始され、翌三年八月には喜多見村の測量に入っています。

測量が終わると用水の開削が始まります。この本工事は慶長四年（1599）一月九日から同十四年（1609）七月五日までの十年六ヶ月をかけて用水本流の開削が行われました。やはり、多摩川兩岸を交互に、下流地域から上流地域へと工事が進んで行きます。世田谷領では慶長七年（1602）に下沼部村で用水開削が始まり、同十二年に多摩川取水口までの開削が終わり、世田谷領で五年もの年月をかけ工事が終了しました。

本流の開削が終了すると、次に、本流から各村の田地へと分水する小堀の開削が始まります。それは慶長十五年（1610）一月から同十六年二月まで、一年一ヶ月の

期間を要しました。世田谷領では当初、小堀の開削は行われませんでした。というのも、もともと六郷用水の開削は六郷領の村々への灌漑を目的としたものだったからです。

稲毛・川崎、世田谷・六郷計四ヶ領で開削された用水は、測量から小堀の開削終了まで実に十五年の歳月をかけた、小泉次大夫58歳から73歳までの晩年の大工事でした。

次大夫堀は完成の後、大雨による洪水の被害をまともに受け、多摩川の増水とともにしばしば分断し、決壊していますが、そのたびに即座に修築が加えられ、元の姿に戻されました。それほどこの用水は、多摩川沿岸で生活する人々にとって重要であり、用水から多大な恩恵を被っていたのです。用水開削後に結成された水利組合のもと、水害による堤防の崩れや老朽化した箇所などに手を加えられながら次大夫堀は管理され、活用されました。

### 〈おわりに〉

小泉次大夫は現川崎市妙遠寺を自らの菩提寺とし、元和五年（1619）十月に自分と妻の死後の冥福を祈って二基の逆修塔を建立しました。次大夫の碑の正面には「為日久逆修菩提也」と刻まれ、側面には「小泉次大夫藤原吉次」と刻まれています。多摩川流域の治水と灌漑に晩年のすべてをかけた小泉次大夫とその妻の遺骨は現在この五輪塔に葬られていると考えられています。